

書評



「ゼロからトースターを作ってみた」

トーマス・トウエイツ著 村井 理子訳 飛鳥新社

只木 慧

Kei TADAKI

ここ数年、「おもしろい本」と聞かれてまず紹介している本の一つである。「ゼロ」からトースターを作るというのは、単に材料を買って行って組み立てましたではない。まさにゼロからで、鉄が必要なら鉄鉱石を掘りに行き、それを自力で精製し、プラスチックが必要なら何とか石油を手に入れようともがく、そこからの作業が著者のユーモラスな口調で語られている。

冒頭で、なぜ「トースター」なのか語られるが、実際に我々の身の回りにあるもので、自作できるものはほとんどない。この原稿を書いているパソコンの部品は秋葉原にきつと売っているだろうが、十中八九専門知識がないと組み立てられないし、ましてそれを原材料からとなったら無理である。それよりはレベルを下げ、著者の哲学をもとに、適切なレベル設定として選ばれたのがトースターだ。だが、この段階でもそも我々がいかに無力かに気が付く。今日文明が減んで地球に投げ出されたら、我々には何ができるのか。それ

だけ先人が積み重ねてきた技術や知恵が素晴らしいと言えはそれまでもだが、こんなに我々は何もできなかったのかという事実は、単純に怖い。

さらにトースターを作る過程で、環境問題にも著者は向き合っていく。安いものが売られるためには、どこかで無理をしている、無理をさせている現実を著者は静かに語る。だから高いものを買いましようとは単純にはいかないが、コミカルなトースター作りの裏で実験をもとに語られる文章には説得力がある。

なお、一応、結末に触れない範囲で断わると、かなり、ズルもある。そんな中でやっと出来上がったトースターも、表紙の写真の状態である。それでもいろいろな人が彼のプロジェクトに賛同し、協力したのは、彼の人徳だけでなく、営業努力のたまものである。たびたび彼が必要な知識や材料の確保のため専門家や企業に送ったメールや、電話の内容が登場するが、行動力と、相手へのアピールのうまさが見どころである。特に一般人の我々には敷居が高い、石油をめぐる交渉を、一般の学生に過ぎない立場でありながらさらりと行って渡り合おうとしている。技術や科学、環境だけでなく、どう相手を味方につけ自分の目標へと進むか。著者のその姿勢のかつこよさにも注目して欲しい。

